

日中民俗学交流のひとこま

何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入

王 京 (COE研究員・PD) WANG Jing

昨年の11月に筆者は本COEプログラムの派遣で、広州・中山大学を訪れた。中山大学の前身は、1924年孫文の提唱で創立された国立広東大学であり、孫が亡くなった1926年に彼を記念するために、その号である「中山」を取り入れて改名した。1952年に教会大学である嶺南大学の文理科を吸収してから、旧嶺南大学の所在地をキャンパスとしてきた。戦前、両大学はともに広州における学問の中心であり、中山大学は北京大学に継いで中国民俗学の中心地でもあった。戦前の中国における民俗学研究、教育状況の一端を探ることを目的とした今回の調査は、同大学の豊富な資料により多くの収穫を得たが、ここでは1920年代における日中民俗学交流のひとこまについて紹介していきたい。

周知のように、日本では民俗学の概説書として、1930年代半ば、柳田民俗学の確立を示す『民間伝承論』と『郷土生活の研究法』が有名であるが、最初の概説書といえば、岡正雄訳『民俗学概論』(1927年)であった。原書は1890年英国民俗学協会より刊行されたゴムム(G.L.Gomme)の“The Handbook of Folklore”を基礎に、1914年にバーン(C.S.Burne)によって大幅に増改訂された同名の著作である。

このバーンの著作は初期の中国民俗学にも多大な影響を及ぼしていた。外国の民俗学理論の導入の口火を切った楊成志・鍾敬文訳『印欧民間故事表』(1928年) 楊成志訳『民俗学問題格』(同年)は共にこのバーン著の部分訳であり、その後、中国学者による初の民俗学概論である林惠祥の『民俗学』(1931年)も同書をベースにしたものであった。

中国民俗学の歴史を積極的に研究、紹介した直江広治はかつて「日本でも岡正雄氏が初めて民俗学の概説書としてバーン女史の著書を訳したのが昭和二年であったから、中国ではそれから一年遅れて同じくバーン女史の概説書が紹介されたわけである。日本における翻訳と、中国のそれとは相互に関係はなく、別々に行われたものであるが、両国における初めての民俗学概説書としてバーン女史のものが、ほぼ同じくして現われたことは興味深

い」(『中国の民俗学』1967年)とこの「偶然なる一致」に感無量であった。しかしこれは偶然ではなかった。

1928年3月の『民俗』週刊(中山大学語言歴史学研究所)創刊号から楊成志による“The Handbook of Folklore”の付録“Questionary”(「調査項目」)及び“Terminology”(「用語」)の訳文が計13回連載され、9月に単行本『民俗学問題格』として発行された。その冒頭に何思敬による序文(6月25日付)が飾られている。これを一読すれば、何思敬は即ち楊に原書を紹介し、且つ調査項目の翻訳を勧めた人物であったことがわかる。

実際、何は最初自分が翻訳して紹介することを考えていたらしい。『国立第一中山大学語言歴史学研究所週刊』(以下、『週刊』)最初の民俗学特集「風俗研究」(1-11・12合併号、1928年1月)では陳錫襄の「ある民俗学著作の紹介」という一文があり、管見の限り、これが中国におけるバーン著について最初の紹介である。そこで陳は「(付録の調査項目は)本来何思敬先生が翻訳の計画を持っていたものであるが、ご多忙でなかなか時間が取れなかった。筆者は待ちきれずにこの特集を機にその一部を訳して風俗調査の参考に資しようと思っていたが、結局とりあえず紹介することにした」と紹介に至るまでの経緯を説明し、原書を貸してくれた何に感謝のこぼしを捧げている。

何が「調査項目」の翻訳紹介にこだわったのは、社会科学としての民俗学の確立のために系統的な調査項目がもっとも役立つと判断してのことかと思われるが、実際“The Handbook of Folklore”からまず訳されたのは、前出、昔話のタイプ研究のための『印欧民間故事表』であった。共訳者の一人である鍾は1927年末に楊と一緒に原書を手にしたと回想しており(「序文」エーベルハルト著、王燕生・周祖生共訳『中国民間故事類型』1999年)、何に紹介された可能性が大きい。

バーンの著作を中国に導入したこの何思敬はいったいどんな人物であろう。

民俗学では耳慣れないかもしれないが、何思敬(1896~1968)は中国共産党の党史では重要な人物で、法律家、



何思敬

哲学者、翻訳家として知られている（中共党史研究会編『中共党史人物伝』第44巻、1990年）彼と民俗学との関わりは日本留学時代から始まったのである。

何は浙江余杭の生まれで、13歳から上海に赴き、出版社、銀行などで働く。1912年に渡日し、京都で日本語の補習を受けた後、

中等美術工芸学校で図案設計を学び、1915年に帰国して杭州にあるシルク工場で設計の仕事に従事していた。翌年春、再び日本に渡り、一高の予科を経て、1917年9月に二高に入学した。当時の同級生に2歳年下の岡正雄があり、有賀喜左衛門と澁澤敬三が彼らの2年先輩にあたる。岡はかつて孫文の中国革命に感動し、東亜同文書院への進学も真剣に考えたこともある人物で、何とすぐに友人となった。1920年秋、何は中国政府の官費生となり、岡とともに東京帝大の文学部社会学科に進学し、二人の友情がさらに深まった。

1920年代初、日本社会は大きな変革期を迎え、民俗学においても柳田国男は「本筋の学問」の樹立に精力的な活動を展開していた。1924年に岡正雄は岡村千秋の紹介で初めて柳田を訪れ、以来信頼を得て度々柳田宅に出入りする。1925年4月、岡正雄は神奈川県高座郡藤沢町鶴沼に転居したが、当時大学院に進学した何思敬、そして社会学の田辺寿利や法制史の内藤吉之助なども近所に住んでおり、若者は「日夜交友」していたという（「岡正雄年譜」『異人その他』1979年）

この年の11月に柳田の指導の下で、岡、田辺、石田幹之助、有賀喜左衛門ら若手研究者を中心に広義の人類学の雑誌『民族』が創刊された。恐らく岡の紹介で何思敬もしばしばその会合などに参加していた（「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集4』1986年）これについて柳田も「支那の学者では、我々が『民族』という雑誌を出していた昭和の初めに来て、社会学を勉強して帰った何思敬という人がいた…細君は支那大使館詰の人の娘で、実践女学校出身だそうで、日本婦人と全く変わったところがなかった」と回想している（「交友録 エリセーフ父子」『神戸新聞』1958年）

同じ時期、中国民俗学も新しい段階を迎えた。北京大

学ですでに1922年12月に『歌謡週刊』が創刊されたが、1925年10月、さらに国学門編輯室、歌謡研究会、方言研究会、風俗調査会、考古学会、明清史料整理会の合同発表機関として『北京大学研究所国学門週刊』が発刊された。

何思敬は当時東洋文庫の主事である石田幹之助を通してこれらの動きを知り、雑誌閲覧の便も得た（何思敬「読妙峰山進香専号」『民俗』1928年4月）大いに感動した何は早速『民族』1-5（1926年7月）に「支那の新国学運動」（署名何畏）を投稿し、中国での新しい動向を、「自己の民族が歩み来つた真実の道程、民族の過去の生活、文化の真相を探究する要求」によって促され、「民族的研究を興し且つ民族学の特殊部門たる日本学の創生」が起きている日本での状況に重ねて紹介している。これが中国民俗学運動の日本への最初の紹介でもあった。

この紹介文を載せた『民族』が発行される7月、中国において全国を統一すべく広東国民政府による北伐戦争が始まった。その刺激で何は帰国を決め、1927年初学業を終え、法学院教授として中山大学に赴任した。

一方、北伐の影響で1926年秋、北洋政府が自由主義学風を提唱する蔡元培校長を更迭するのをきっかけに、多くの教授が北京大学を離れて南下した。その中には顧頡剛など民俗学運動の指導者も含まれていた。中山大学でヨーロッパの漢学に対抗し得る、中国人による中国研究の学術機関を構想した傅斯年が廈門大学から顧を招き、1927年11月に語言歴史学研究所を創立したが、同時にその下で顧を中心に中国で「民俗」を掲げた最初の学会組織「民俗学会」が結成された。

何思敬の帰国はちょうど中国民俗学の中心が北京大学から中山大学へ移り、民俗学理論に対する関心が高まり、組織化の活動が活発になった時代と巡り合い、彼は民俗学会の数少ない文学院以外からの会員であった（「民俗学会一年來の経過」『週刊』62-64合併号、1929年1月）

何が帰国してまもなく日本では『民俗学概論』が出版されたが、その「訳者小序」では、岡正雄は「又何畏、樋口その他の友人諸君の厚志も併せてここに銘記したい」と記している。前より“The Handbook of Folklore”の存在と価値、そして岡訳の進行などを把握していた何は、民俗学会の成立を機にそれを会員に紹介し、そこでまず陳錫襄の紹介、それから岡訳を参考した楊成志と鍾敬文の翻訳があったと理解できる。

“The Handbook of Folklore”の中国導入の背後には、このように何思敬という人物を架け橋とした日中民俗学交流の知られざる一頁が隠されているのであった。